

●●「文藝界」の同人雑誌評がなくなって、同人雑誌界はよくも悪くも一つの支柱を失った観があるが、逆にこの混沌のなかから、どのように主体的な表現の基軸を打ち立てていくか、試練と好機を迎えていると言っている。

出版不況の背後には、紙媒体のマスメディアの構造ピラミッドが根底から揺らいでいる動きがある。大手出版社、東販・日販を中心とした書店流通販売の体制が、パソコンやインターネット、携帯電話の普及によって、崩れつつある。パソコン画面の前では、老舗の出版社も、新興の名もない出版社も同等の存在として立ち現れてくる。これだけでも、既成の権威が揺らぐ動機としては十分である。もし書店流通以外の場から本のベストセラーが出現してきた場合、そのピラミッドはまったく新しいものに取って代わられるだろう。少なくとももう一つ別な立体が存在することになる。

これを別な角度から見ると、商業文芸誌（もうとうに商業的には成り立っていないので、本来はこう呼べないのだが）に現れる作品群と、同人雑誌に現れてくる作品群との比較がまったく新しい地平から立ち上がったてきであるのであって、これまで閉ざされがちだった同人雑誌の横のつながりを広げていくことによって、商業文芸誌の現在の欺瞞がいつそう露わになってくるだろう。おもしろくない文芸誌からはますます読者は遠のき、同人雑誌のような自主的な表現活動との乖離はさらに大きくなっていくことが予想される。

同人雑誌作家の高齢化が言われて久しいが、同人雑誌と商業文芸誌とどちらが先になくなるかと想像してみれば、商業文芸誌の方がはるかに早くなくなりそうである。本来共存・共栄の関係にあるべき姿が、一方的な打ち切りによって自らの首を絞めている展望のなさ、自壊を早めている。

しかし、では、同人雑誌の側が、独立的・自主的な文学の場を打ち立て、それに対抗できるものを築けるかという、これもそう容易ではない。大きなビジョ

ンと大きな座標軸、積極的な行動に、運もさらに加味されて、はじめてレールが敷かれるだろう。衰退を深める混沌に終わるのか、新たな誕生への胎動となるのかは、ビジョンに向けて能動的な働きかけをするかしないかにかかっている。新しい仕組みや機能が、同人雑誌作家の意欲をかき立て、さらに優れた作品が生まれてくることも十分にありうることである。

その意味でも、「文藝界」の同人雑誌評を受け継いだ「三田文学」も、もともと同人雑誌優秀作を拾う意図で発行されている「季刊文科」も、どのようにそれを引き継ぐのか全国の同人雑誌からいま熱い視線を集めている。ただ、季刊という制限の中で、どこまでそれを背負いきれるかは、しばらく様子を見なければならぬだろう。

今季の同人雑誌評は、そうした動きを一方で見守りつつ、同人雑誌のエネルギーの行方を探りながらの散策となった。創刊の雑誌から見ていきたい。

●「繁」（大阪府）創刊号

創刊号としては、よくこれだけの書き手が集まったと思えるほどにレベルは高い。誌面作りもしっかりしていて、編集後記にも創刊の心意気が伝わってくる。「書くことによって、自分の思考の浅さや感性の鈍さを思い知らされ、活字にすることでそういう自分をさします」／いつも力不足で、だから、今度こそと書きつづけるのでしょうか／表現とは執着です。他人を巻き込んで、啞然とするほどの執着です。さまざまな執着が「繁」に載っています／読んで下さい（佐久間慶子）

——「執着」と言い切るところに、力を感じる。

作品はそれぞれ力が入っているが、「朴がいた町」（国方勲）は、特に訴えてくる力が強い。これは戦時下、北朝鮮での子供時代を扱った作品で、学校の様子、植民地での日本人の生活の様子、朝鮮人との関係など生き生きと描いた好作品である。子供の眼を通した植民地社会は、どんな記録よりも鮮やかな人間の姿を伝えてきて、みずみずしい生命感に溢れている。「疾風は

うなりをたてて社宅の周りの木々に襲いかかり、木の葉が千切れて空中を逃げまどい、それをたたき落とすように土砂降りの雨が降ってきた」という箇所など優れた描写が随所にある。朝鮮人兄弟がママシを捕えるシーン、知恵おくれの朝鮮人の少年といっしょに野球をするシーン、そしてその少年が凍死するところも北朝鮮の風土を背景に生動している。映像的な筆のかさはすばらしい。しかし、戦時下の記述として、いくつが齷齪が感じられるところがあり、それが全体の信憑性を揺らがせる印象を与えるのが惜しい。たとえば一九四四年十一月の朝鮮の日本人学校の修身の時間に、レイテ沖での特攻に触れるのはいいとしても、「沖繩戦は翌年四月」、またこの時期の大阪からの転校生が「空襲があつたりしてそれどころではなかったです」（焼夷弾による本格的な夜間空襲は一九四五年に入ってからで、それまでは軍需工場の爆撃が主）というのも、不自然で、しっかり調べていない印象がある。せっかくの生き生きとした描写が損なわれるので、労を惜しまず、一つ一つ確認してほしい。「朴」が出てくるのは、最後の少しの部分なので、全体はもっと長く、これから長編小説になりそう。期待のできる作品である。

「親やらい」（翔明子）は土蔵倉を壊す話を夫婦交互のモノローグで進めていく構成は凝っているが、効果が出ていないかは疑問である。夫と妻のモノローグにあまり差がなく、それぞれのエゴが出ていない。最初、土蔵を壊す話かと思つて読み進めていくうちに、いつのまにかその話は消えてしまつて、懐古なのか、夫婦間の深層心理なのか、親の面倒見の新鮮感なのか、焦点が定まらないまま拡散してしまつていく。技巧に溺れたままテーマを見失つてしまった。

「山川淳子の部屋」（あかね直）は、五十四歳の独身女性の部屋をテレビが撮るといふ設定は奇抜でおもしろいが、何のためにそれをして、その人間を文学の前

に裸にするのか、目的がない。これも設定に飛びついて、着地を失った小説。

「水に咲く」(馬場恭子)は珍しい水泳小説。スポーツものは、練習の厳しさや大会での緊張感などワンパターンになりがちなのでむずかしいのだが、「オリンピックの果実」のようにみずみずしい感動を生み得る領域である。この作品はパターンに陥って成功していないが、すでに体験したことのない、果実の胚珠は宿っている、諦めずに結実してほしい。自分で創り出す何かを付与することが必要。

●「渤海」(富山県 57号)

「風景―月壺―」(山口馨)は、よい筆致で、作品が落ち着いている。シリーズの前作は、文章のリズムが速すぎて対象を捉えていない恨みがあつたが、今回の文章は快い律動で対象がしつかり筆に乗せられている。五十歳で独身のサラリーマンの、棄郷と帰郷の物語で、二つの間に揺れ動く心を、恋愛を絡めて陰影深く造形している。人間の心の機微に濃い影が揺曳している。文章のリズムにそれが見え隠れするのがいい味になって、朝鮮陶器の二つを一つに合わせるという制作方法との整合を見せて、いい結末になっている。もしこれに月のシーンがもっと濃密に描かれ、自然の月光の風景と符合していたら、さらにタイトルとの共鳴を増して作品をいっそう深めただろうと、少し惜しめる。「風景」が物の形に留まっていなくて、少し惜しいが、優秀作である評価は変わらない。筆者に何かが見えてきているようにも感じる。

上田千之「国之本」は、批評風の回想随筆だが、江戸期から明治、昭和にわたる施政を痛烈に批判する精神は旺盛で小気味いいが、随筆の流れを構築性欠如の逃げに使っている、結果的に遠吠えにしかなっていない。この批判だと何かを生み出さないだろう。

「リストカット」(むらいはくどう)は、タイトルは刺激的で方法も新しいが、肝心の部分が借り物で、リストカットを観念でしか捉えていない。文芸思潮のエ

ッセイ賞や現代詩賞にはリストカットをした作者の作品が多数寄せられる。現実はずっと深刻で、心はボロボロになっている。もし彼らに読ませたら、放り出されるだろう。こういう題材を扱うなら、現実に行っている若者の内面の荒廃をもっと真つ直ぐ捉えてほしい。

やはりエッセイ風の小説「山桜を待つ」(佐多玲)は次々に逝く死者を見送り、自分もその流れに立つ時間を、山桜の咲く自然の美しさに重ねてそつと奏でる調べは、味よく成功しているが、もう一つ心に残る切れ込みがほしい。

●「湧水」(東京都) 40号・41号

「湧水」は読みやすいレイアウトだが、40号については文章のノリが重視されているのか、文章の底に沈んでくるものがない。「万の文反古見苦しい手紙の物語」(平野佳美)は江戸時代の手紙のスタイルを取ってパロディを交えながら現代風のトーンで新味を出そうとしているが、結果的にはテーマの見えない遊びに終わっている。「砂漠の雨」(冬樹美緒)もチュニジアという変わった土地を舞台にして一見目新しさを装いながら、結局は観光にとどまった。「底に棲む」(飛田一歩)だけが、異質な題材で、山を爆破する飯場の男たちを描くノリを無視した作品となっているが、これも外から飯場を見ていて、山をダイナマイトで切り崩す現場の迫真力は伝わって来ない。ただの渡り鳥とのひと時の恋愛に終わってしまった。

41号では、「轟音」(篠宮亜季子)が文章も手堅く、まとまっている。人間の心の奥にある過去の傷の深さをよく描いているが、できればその決定的なシーンを直裁に描いてほしかった。テーマへの吹き込みであるにしても、もっとリアルな言葉が出てきてもいい。言葉そのものの持つ力をここに発揮できれば、グサリと来る作品になっただろう。「ダブルの布団」(扇真知子)は個性の強い認知症の叔母といっしょに暮らす話だが、だんだん叔母の内側を理解することによって、親近感

を深めていくところに、ふつうの老人ものとはちがう味が出ている。結末に深い安堵感が残るのがいい。

●「私人」(東京都) 64号

新宿住友ビル朝日カルチャーセンター発行の「私人」も今号はやや甘い。お手軽の題材をお手軽の文章で書き綴っているサロンの傾向が匂うてしまっている。むしろエッセイ風の短い文章のほうが光るものがある。「野生の誘惑」(西畑里江子)の「ホリスティック医療」は記憶に残るし、「マルコの福音書」(長野統)も新共同約のリアリティに触れて、短いながらも光るものがある。こういうものを膨らませていって、誌の全体の色を積極的なものにしてほしい。毎号発行するなかにはどうしても、内容の濃淡の差ができるのはしかたがない。次号に期待する。

●「文芸きなり」(愛知県) 67号

「秋桜」(西垣みゆき)は、熟年女性の離婚と自立の苦闘が、誠実な筆致で紡ぎ出されていて、好感の持てる作品になっている。コンビニの弁当仕出し工場の暗いうちからの労働作業などリアリティとともに、生きていく実感が溢れていて、素直な叙述のなかに人物の呼吸が伝わってくる。就職に失敗した息子の自立の苦闘に加えて、夫との離婚の顛末も説得力があり、それが熟年を超えて女一人で生きていくことのつらさと低く協奏して、味わい深い楽曲として流れている。筆者の筆力はある。しかし最後に、離婚した夫の浮気相手の女性に職場の元同僚を重ねようとしたのはやりすぎで、話が壊れる。交通事故に遭いそうになるのも、蛇足。もつと自分の足下を見つめる深い終わり方があっただろう。

「電野」(石川好子)は、熟年の恋の淡い破綻に友人の死を絡めた裏面のドラマはこの年齢の厚みにふさわしい奥行きある陰影を醸し出しているが、全体に筆致が浅くて、表面的な印象が残る。時間がなかったためこうなったのかもしれないが、じっくりとした筆のほうがいい。このテーマには合っているだろう。「六月五日」(長澤

奏子)は女性には珍しい歴史小説で、江戸遊学時代の吉田松陰と熊本の宮部鼎蔵を扱っている。この期の吉田松陰を追うのは興味がひかれるが、黒船の見聞などもっとドラマが盛り上がりるところは省略してしまい、代わりに宮部鼎蔵に視点が移る。宮部についても、池田屋の近藤勇の討ち入りに主眼が移ってしまった、どのように最期を遂げたかに終わっている。人物造形や一つの時期の再生まではなされていないのが残念。また彼らが黒船の何と向かい合い、時代が何を要請していたのか、歴史の捉え方が浅い。短かすぎるのも手伝って、そのため何を描こうとしたのかねらいが拡散してしまった。

「文芸きなり」には短文で佳いものもたくさんある。「頼りになる人」(内藤那智子)、「調理」(長澤奏子)、「手吹ガラス」(西垣みゆき)、「机」(服部愛子)、「人の技」(藤吉佐代子)、「注射器」(石川好子)など、ここにはあげられないものも含めて、同人誌ならではの豊かな短文の味わいがある。

●「海」(福岡県) 67号

「海」はレベルの高い雑誌で、書き手は粒揃いである。挿画がまたいい。

赤松健一「我らの行方」は、一五〇枚近くの力作で、関西の配電会社の内部の群像を描いた組織小説である。オーナーが個人的な資産運用の失敗から自社の株を他社に譲り、企業買収によって関東の同業他社の傘下に入るところから始まるが、企業の内部の人間模様は経営陣を含めてしっかり書いてある。かなり企業経営に携わった人でないところまでは書けない穿った運びで、彫りの深さは相当な社会経験を想像させる。話の運びは高い技量に裏打ちされて、読み手をグングン引き連れていく。人物の描写やその輪郭も明瞭に浮かび上がってきて、キャラクターの捉え方も抜群である。このボリュームを一気に読ませる筆力には鍛錬の積み重ねの上的自在感が感じられる。元来企業小説は、組織が大きくなければなるほど難しくなる。人間のドラマ

が組織の無機質性に吸収され、人の影が薄くなっていることと、人間の自由が狭められて、悪や頹廃に沈む模様が濃くなってくるからである。この小説も最後はその模様を深めていくが、普通の企業小説と違う所は、多数登場してくる人物が、それぞれに主人公として生きていて、各自の人生に足掻きながら、生の円環を描いているところにある。円環の連鎖によって一つの組織が浮かび上がるというところはたしかにあり得ること、この場合それが十全に成功しているかというところは別にして、一歩踏み込んだ方法であることはまちがいない。この方法によって企業に生きる人間群像と組織模様がそれらしく浮かび上がってくるからである。

泡沫を想わせるこの手法は、一方では現代の組織社会と人間の腐臭を立体化させてくる。また一方で、つながりがあるようでなく、ないようであるこの連環が現代社会の一面をもよく象徴している、組織と人間の現代的なありようを反映しているとも言える。すべての登場人物が主人公で、すべての事件が同じ重さを持っているという発想は、新しい可能性を帯びている。この方法だと、それぞれのシーンも独立的な性格を持ち、同等の立場からの協和音を奏でることが出来る。阪神の工場地帯の歴史を感じさせる描写や酒場の由紀の言葉も強く残るのはこのせいかもしれない。大阪弁も生きている。電線や配電の具体的な工事の描写や労働現場を入れたら、もっと企業の顔がわかっただろう。タイトルの「我らの行方」は、あまりに漠然としていて、「我ら」という共同意識に訴える必然性がどこにあるのかという不満と同時に、逆に現代の無責任性と不安とを茫漠と象徴していてそれなりにいいのかもしれないという肯定も覚える。もう一作見てみたい。

「再会」(牧草泉)も、人生の転変の陰影が濃く匂う作品で、過去から立ち上がってくるドラマが、生きる深い谷を覗かせる。高校時代の下校時に通っていた道で少女娼婦と声を掛け合い、親しくなる心の接触がすぐにはかない別離になるのだが、何十年という時を超えて新聞社経由で再会を果たすことになる。少女は大学教授になっており、転落を乗り越えた奇跡の身分を持って再接近するのだが、それが少年期の梅を見に行き誘いと重なって時間の隔たりが人生の深みとして浮上してくるところにこの作品の魅力がある。

●「じゅん文学」(愛知県) 58号

「リセット」(傳頻伽)は、好短編。痛告知を受けた夫が沖繩への旅に出て自殺する。妻は、その死に隠されたものがあることを感じて沖繩へ行き、警察から「紫館」を知らされる。行ってみるとそこはS Mの館だったという設定は、小説としてはよくありそうだが、作者の技量が確かで、一歩踏み込んだ世界が展開される。死と隣り合わせの快感が夫の死因だったと推測しながら、自分もその世界を体験し、夫への追慕とともに快感に目覚めていく結末は見事に焦点を合わせている。ここには死期を告知された人間が快楽のうちに死を選ぶことの魅惑が覗いているので、今後掘り下げようによつては重大な問題が展開される可能性がある。この短編はその入口に立っている。作者がこれをもし自覚的に、現代の問題として取り組んでいったら、とんでもない世界が切り開かれるだろう。タイトルの「リセット」は味気ない。

この短編は、短編として成功しているが、他の作品は着想はおもしろいものの、それに溺れて小説としての根や幹を持つ努力がなされていず、安易に短さに逃げている。今号は腰の座らない作品が多かった。

●「湾」(広島県) 277号

この同人誌はエッセイが主で、小説は「暮れ残る」(松原三和子) 一作である。

「暮れ残る」については、「惚けのふりをすることを覚えた」から始まる老女性のモノローグがそれなりに読ませるが、銀華文学賞で老人問題を扱った優れた作品に多く接している立場の者には、物足りない。密度の不足は否めない。この誌の真の魅力はむしろエッセイにある。藤本仁一人による「八木義徳展」や「ジョー・

オダネルの一枚の写真」「水牛礼讃」など事実に沿った短文は、冗漫な小説よりはるかに読み応えがある。

こういう文章に接すると、フィクションの必要性をまづ疑うことも大事ではないかと思えてくる。真剣な思いのこもった文章は、必ずしもフィクションだけに頼る必要はなく、それだけで十分残りのものだということを認識させられた。「ハルビンの梅の花」(木戸博子)は、エッセイとしては平凡だが、歴史を実感する人間と時間と空間の壮大な思いは伝わってくる。

●「京浜文学」(神奈川県) 13号

主宰の神谷量平氏の健筆ぶりには驚かされる。たしかすでに九四歳と記憶しているが、巻頭の「時評」で映画「靖国」を論じ、「狂歌劇場」で時代を切り、さらに巻末の一幕戯曲「ボク・ここにいますよ」を発表している。氏の活動を見ていると、この年齢でこれだけ骨のある文章を書き続けられるということに、励まされ、感動する。

「京浜文学」は歴史に対する視線が鋭く、啓発される文章が少なくない。歴史散歩の「華麗なる一族と二・二六事件」(秋間瑛子)は二・二六事件の一端、湯河原の光風荘の事件に触れている。当時の前内大臣牧野伸顯伯爵が河野陸軍大尉の率いる一団に襲われ、巡査と撃ち合うなか、牧野は孫の和子に助けられて、九死に一生を得る。その顛末を書きながら、牧野は大久保利通の次男であること、牧野の長女が吉田茂の妻となり、その間に生まれた孫娘の和子が祖父の牧野を救い、さらに後年麻生太賀吉と結婚して現在首相の麻生太郎を生む家系が示されている。確かに華麗な血族であり、これが現代にも及んでいるという歴史の因縁的な一面を見せられ、興味深かった。

連載「地の果て西アフリカを目指して(五)」(木村為蔵)は、やはり無条件におもしろい。当時のアフリカの様子が手に取るようにわかるし、日本の商社マンがどのようにして開拓していったか、当地の地理・歴史・社会・宗教を身体で学びながら日本製品を浸透さ

せていく過程は活劇を見るおもしろさだ。ガーナで野口英世の記念碑を見る下りも、心を打たれる。どこまで行っても地平線を見るニジエールへのドライブ行もアフリカの壮大な大地を伝えて、迫真力がある。体調がさらに書き残す時間を許しているかどうか、切迫した状況のなかでの執筆が、いっそう緊張感を強めている。完成を祈りたい。

●「人間像」(北海道) 178号

「多喜二まんだら雪明り」(村山英治)は二〇〇枚近い力作で、小林多喜二の意識に憑依したスタイルを取っている野心作。多喜二の恋人のタキなどを配置してよくその軌跡を追っているが、多喜二の真の苦悩が見極められていないせいか、核になる感情がぼやけていて、全体も流れてしまっている。多喜二が直面した当時の社会状況や労働状況は現実の問題であって、リアルズムでないといふ追及しきれなかった過酷なものだったろう。その厳しい状況が抜け落ちてしまっている観がある。また官憲と共産主義との対立ももつと厳しいものがあつたはず。情緒だけでは捉えきれないものをどう処理するか、それが課題だったろうし、むずかしかったことだろう。コラージのような方法で、当時の新聞記事や記録や日記やメモなどを適当に配置していくことも「まんだら」にはなつたかもしれない。このままで終わらせてしまうのは惜しい作品。

「人間像」は二九〇ページの堂々たるボリュームで、往時は全国規模で百数十人の同人を抱えていたという伝統のある同人誌。その豊かな作品群の伝統は現在も引き継がれていて、まずその多様な厚みに驚かされる。エッセイも批評も自由闊達に書かれていて、歴史から社会批評、宇宙論まで多岐に渡り、それがこの誌の不思議な活力になっている。巻末の根保孝栄氏による「同人雑誌評」も言いたいことがはつきりしていて気持ちいい。北海道ではこれだけの同人雑誌評をやっているのは、「人間像」だけと思うが、注目すべきものだろう。傾聴すべき点も多い。これだけの量に目を通す労力と

情熱に敬意を表したい。

●「相模文芸」(神奈川県) 17号

相模ならず「相模文芸」はおもしろい。ここには文学を堅苦しいものとは考えず、みんなで楽しむもの、豊かな社会知、有益な人生味を共有して楽しみ合おうとする真の賑わいがある。参加している同人が、企業や組織の役職経験者だったり、人生の起伏に特に富んだ人たちが集まっているように見受けられる。社会を批評したり眺めたりする眼も多様で、さらにその上に余裕を感じられる。「自然淘汰」(神尾博)、「うれしい誤算」(出井勇)、「走馬灯」(日下玄)、「私は喉頭カント闘った」(牟田ゆうじ)、「遺産相続の風景」(木内よしひさ)など、おもしろくて有益な知識が得られる。細かい表現の錬度や緻密さなどは頓着せずに、ためになるおもしろさを提出し合つて、活気を作っている。

特におもしろかったのは「文豪の遺言(三)」(木内よしひさ)と「ババ死んじゃダメ」(本城確)である。今回は向田邦子、尾崎紅葉、田山花袋、国木田独步、大宰治を取り上げた「文豪の遺言」は、それぞれの作家の最後の生活状況がよくわかると同時に、自分の文学や人生をどう捉えていたか、短い中に鮮やかに浮かび上がつてきて実に興味深い。借財がいくらかあつたか、その後印税はどう配分されたか、現実的なことも細かく書かれていて、興味がつきない。さらに向田邦子には森繁久弥と澤地久枝の弔辞も載せられてあり、これがまた胸を打つ。作家や俳優の弔辞には身近な人の死を前にしての言葉だけに名文が多く、それ自体が優れた文学になっている。実におもしろい角度で取り上げた一つの快挙で、これは本にされてたくさんの方の共感を売るものになるだろう。様々な意味で文学を楽しめ、ためになり、かつ感動に溢れている。

「ババ死んじゃダメ」は、タイトルとはおよそ結びつかない企業小説である。バブル崩壊の時代に上役が会社の金で株を売買して大穴を空け、その尻拭いをさせられるサラリーマンの仕事を追いかけているが、企

業内部の深刻な恥部をおもしろいタッチでビビッドに描きながら、自殺しかけた瞬間を子供の声に救われるストーリーは、組織の損害の問題がリアルであるだけに、逆に生きて迫ってくる。おそらく多くのサラリーマンはこの板挟みの中に生きていて、一歩間違えば、窓を開けて飛び降りたい心境をつねに抱えていると思うが、それを明らかに摘出している小説手腕は注目値する。救いの道もよく捉えていて、読後感もさわやかなものが残る。この作者は以前にも片腕を失う事故とその後の生き方をテーマに同人雑誌優秀作に取り上げられたが、まったく別なテーマでこれだけ書ける力はあるべきものがある。文章は純文学のきめ細かさとは別な質のものだが、それを超えて読ませる牽引力がある。

●「九州文学」(福岡県 526号)

九州文学の今号の書き手のほとんどは、さすがに高レベルの文章家で、練度の高い筆運びには、熟練の落ち着きと安定感がある。相当な切磋琢磨がなされたはずで、これが九州文学が有している揺るぎない伝統の力と再認識させられる。しかし読み終わってでは何が残ったかと自問すると、霧散してしまう消耗感も付きまとう。これは、文章力によりかきすぎて、素材の選択に労力をかけていない結果のように思われる。たとえば「空井戸」(池辺正臣)について言えば、戦争中の北支で憲兵と部隊との対立を克明に描いていて、その手堅いリアリズムの筆致は見事な技量を見せている。前線での憲兵と部隊との確執の現実を迫真力をもって呈示してくるし、「慰安婦」の実態や心理はなるほどと感心させられるが、しかし確執の本質に小説にするだけの意味があるのかどうかという疑問を投じると、どうしても空虚感が否めない。結局「慰安婦」をめぐる戦場での性欲による確執だったというのでは、あまりに寂しい。むしろエッセイなどの短いもののほうが、この素材は生きるのではないか。これだけの高い技量を注ぎ込むにはもったいない気がする。極

端に言えば、この構造図式なら、現代の企業の中でも十分書けるはずである。他国での殺し合いの前線にはもともとと書かなければならない人間の問題がゴロゴロしているのではないかというのが、戦争を知らない者の期待である。たいしておもしろくない素材を豪華な文章構築で飾るチグハグさが今号の他の多くの作品にも言える気がした。

むしろおもしろかったのは、「第一回福岡県同人会の報告」(戸島哲男)である。「迷った」うえで書かれた「四つの問題」が普遍的な問題として浮かび上がっていた。「イエスよ涙をぬぐいたまえ」についてはまったく同感。土井敦子さんの発言「私はこの頃、文学賞受賞作品でも、心から感動を覚えた作品がほとんどありません。私は若い書き手の指導も随分やってきましたが、最近の若い人たちは、文章が達者になると、その人らしい個性がなくなる、つまり小説の心が失われる作品になるのが残念です」という言葉も、共感。この報告は密度の濃い会の様子がよく伝わってくる。同時に、九州文学という同人の文章稽古場の雰囲気も伝わってきて、さすがにこういう会の中に文章力が鍛えられているのかと納得させられた。

●今回の優秀作は少なかつた。豊作のときもあれば、逆の時もある。優秀作が少なかつたからと言って、同人雑誌を読む楽しみが失われたわけではない。収穫はたくさんあり、このように文章を書く営為が日本全国でひたむきに続けられているという手応えを感じるだけでなく、充実感がある。新しく送ってくれた同人誌諸氏には心から感謝したい。少しずつ日本の同人雑誌の模様が覚えてきた気がする。

今回の優秀作は「風景―月章―」(山口馨／「渤海」57号)一作のみ。ノンフィクション部門では「文豪の遺書(三)」(木内よしひさ／「相模文芸」17号)を推す。準優秀作は小説部門「朴がいた町」(国方勲／「繁」創刊号)、「轟音」(篠宮重季子／「湧水」41号)、「秋桜」(西垣みゆき／「文芸きなり」67号)、「我らの行方」(赤

松健一／「海」67号)、「再会」(牧草泉／「海」67号)、「パバ、死んじやダメ」(本城確／「相模文芸」17号)、「リセット」(傳頻例／「じゅん文学」58号)、「ノンフィクション部門では「地の果て西アフリカを目指して(五)」(木村為蔵／「京浜文学」13号)、「華麗なる一族と二・二六事件」(秋間瑛子／「京浜文学」13号)としたい。

●最近の同人雑誌評の新展開について、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、「文学街」と共催で、この三月二十九日に、名古屋から中部ペンクラブ会長三田村博史氏、名古屋大学堀内守名誉教授らを迎え、「三田文学」編集長加藤宗哉氏、文芸評論家の勝又浩氏、菊田均氏をお招きして、会長森啓夫と作家集団「塊」のメンバーを交えて「同人雑誌の新展開」というテーマで座談会を開く予定。今後の同人雑誌界の方向性に関わる重要な話も生まれてくるかもしれない。この座談会は、収録されて「文芸思潮」に掲載予定。乞御期待。(全国同人雑誌振興会／選考委員・五十嵐勉)

分ける知 絡む知 束ねる知

堀内 守 著

カタチをば 裁ち直し居候

古典から現代の哲学をわかりやすく絡めながら説く文学の新地平。

現代における文学の深い可能性が開かれる。わかりやすくてむずかしいが、開かれる気持ちになってほっとする新文学入門

中日出版社 2000 円

堀内守 全国同人雑誌誌評

●「胞山」(岐阜) 19号

本誌は、一九九九年に、東濃地方に住む九名の同人で発足し、以後、年二回、着実に発行を続けてきた。次号は一〇周年記念の号となる。誌名の由来は、恵那山の古称に因る。書画に通じた同人が題字、表紙絵、カットを担当する。

絵に堪能な久野治が「中部日本の詩人たち」を連載中。今回は「春山行夫」を取り上げ、その活動の場と人脈、詩の特徴を正面から受けとめ、再吟味するのに成功した。また水木優は「短歌・風のことは」と題し、斎宮跡を訪ねた体験を一首に詠んでいる。音の響きが独特の切り口によって浮かび上がる時の相と呼応して独特の世界を作り上げている。日高りょうは、ユニークな掌編「ララ婆の死ぬまで一生懸命」と題し、風通しのいい文章で、生きる意味をさりと表現している。独特のユーモアが見事。菅原結花は連載の「氷雨」第二部第二回で、短文を列ねつつ、家族の人間関係に光を当て、翳りの部分まで透視する。久野治がイラストを描きつつ、「皇女・和宮様「お月見の偽」と題して、和宮が中山道の一六宿に宿泊して降嫁したことを考証。その成果を作詞した。マキ奈尾美がこれに曲を付けて歌っている。佐和崎千緒が「短歌・コラーージュ」と題して、カウンスリングの経験に基づいて独特の世界を表現している。加藤八千代が連載「パレルモの海」(二)で、日本初の西洋画家ラグーザ玉の修業時代を格調高い構成で仕上げている。水野恭平は、「近代女子教育の開拓者」という観点から「下田歌子」に関して豊富な資料を駆使して実り多き成果をまとめた。歌子誕生後一五〇年になる由。村山清江が独特の「後記」をまとめている。「独特な」のゆえんは、本誌スタート時点の心意気に立ち戻り、再出発を訴える「アッピール」になっているためである。

(堀内守／名古屋大学名誉教授)

全国同人雑誌振興会

MAGAZINE VOICE

●●同人雑誌の声●●

●「湧水」第40号編集後記より

文学会の「同人雑誌誌評」が年内に終了するという発表は、多少ならずともショックでした。これまで何度か誌面に「湧水」を取り上げていただけたことがどれだけの励みになったか知れません。大きな支えを失うのは残念でありませんが、やはりこれから書き続けていくしかないでしょう。(歩)

●「私人」第64号編集後記より

「文学界」から同人雑誌誌評欄がなくなるというお知らせは、これまで懸命に小説を書き続けてきた者にとつては、かなりの衝撃であるように思う。私自身、小説を書き始めてからというもの、「文学界」の同人雑誌誌評に取りあげられることを念頭に頑張ってきたところがある。そして、努力の甲斐があり幾度か取りあげられ批評を書いて頂いた。それが小説を書き続けていく上でどれほどの励みになっていたことだろう。批評の一つ一つがまるで宝石のように私の人生に輝きをあたえてくれたような気がする。残念でならない。(ま)

●「仙台文学」73号編集後記より

昭和二十六年から始まったという、月刊文芸誌「文学界」の同人雑誌誌評の欄が、十二月号をもって廃されることになった。地方で創作活動を試みる者にとつて、大きな拠り所を失った感が強くする。さいわい季刊「三田文学」に引き継がれるようだが、これまでどおりの形態が保たれるとはとても思われない。同人誌を取り巻く環境が、いよいよ厳しくなっていることを認識させられる。肝に銘じつつ、ほそぼそながらも活動をつづけて行けたらと思う。(静)

●第七期「九州文学」526号

「文学界」―同人雑誌誌評打ち切りで思うこと―

「九州文学」編集長／波佐間義之

半世紀以上にわたって続けられてきた「文学界」同人誌誌評が本年から告知通りに打ち切られた。同人雑誌の高齢化、それに伴う雑誌の現象というのがその理由らしい。そのことに対する思いを昨年「文芸思潮」にも書かせてもらったが、「灯台の明かりが消える」ような心境だと私は表現してしまった。それほどのショックが私の体を貫いていたのだ。

しかし、そのショックはもうない。来るべきものが来てしまったら、あとは開き直ること以外に残されてないからだ。

かつてこの同人雑誌誌評は文壇へのパイプ役として、これまでその役割を果たしてきたことは周知の事実だ。それを励みにシコシコと同人雑誌に書いてきた人も少なくはない。優秀な作品は同人雑誌推薦作としてほぼ毎月「文学界」に転載されていた時期もある。転載になると、芥川賞や直木賞の候補にノミネートされることも珍しくはなく、その後にチャンスを得て受賞した人もいる。

私の住む近くに村田喜代子さんという人がいる。ご存知のように「鍋の中」で芥川賞を仕留めた人だ。彼女は地元同人誌に参加していたこともあったが、個人誌に「熱愛」というタイトルの作品を発表して、それが同人雑誌誌評の批評家の目に留まり、同人雑誌推薦作として「文学界」に転載され、芥川賞候補にノミネートされた。以後も次々に「文学界」に発表のチャンスを与えられ、何作目かで受賞に漕ぎつけ文壇に躍り出た。受賞後の彼女の創作活動はここで説明するまでもない。この「文学界」同人雑誌誌評がなかったら現在の村田さんが存在したかどうか。

村田さんだけではなく、多くの同人雑誌作家が「文学界」同人雑誌誌評を己の創作活動のひとつの指針とし

●● 同人雑誌の声 ●●

ていたのは間違いない。私もその一人だった。

私が「九州人」や第五期の「九州文学」などに書き始めた頃の「文学界」同人雑誌評の評者は駒田信二さん、林富士馬さん、小松伸六さん、久保田正文さんたちであった。その後を引き継がれたのが大河内昭爾さん、松本徹さん、勝又浩さん、松本道介さんたちである。

この「文学界」同人雑誌評に私の作品も時々取り上げていただいた。そんな誌はたいてい買って保存している。数えてみると二十五冊ある。このうち、恒例のベスト「5」入りしたのが七作ある。しかし、念願の「文学界」転載のチャンスは私には与えてもらえなかった。

(中略) 同じ文壇への登龍門として各雑誌社にはそれぞれ新人賞というものが設けられている。私自身、その新人賞にも何回か応募した経験があるけれども、ほとんどが一次予選でふるい落とされている。千数百編は毎回集まる応募原稿はまず下読みされるのが慣例だ。(中略) そんな新人賞よりも一応文芸評論家と肩書きのある先生方が読む「文学界」同人雑誌評の方がまだ信頼できたわけである。

しかし、その同人雑誌評も消え去った。同人雑誌はもう利用価値がなくなった、というのが「文学界」のホンネではなからうか。なぜ? 利潤的価値を優先するからには文学性よりも売れる作品でなければならぬからだ。ここに同人雑誌縁切りの理由が隠されている。最近の新人賞や芥川賞の資質が利根的な商業主義のベースに乗じられているという現実を見れば歴然としている。そういうよこしまな思考に支配されるかぎり日本の文学の衰退はますます増長されていくものと思われる。

日本の文芸文化、つまり日本の文学を支えてきたのはまぎれもなく同人雑誌である。文芸出版の凋落はいよいよ激しさを増していくだろうが、同人雑誌が消滅することはない。純粹に文学を愛し、自由闊達にモノが言える文芸雑誌こそ文学の本流ではないのか。

●「人間像」第178号「同人雑誌評」より

いつの時代も、文学とは何か、純粹文学とは、通俗文学とは、の論争は絶えなかった。

現代が、もし、小説の不振の時代と言ふのなら、その罪科は、書き手にあると言ふよりも、拾い屋と言われる文芸時評家に帰せられる、と私は分析している。

昭和三十年代に、石原慎太郎、大江健三郎、原田康子を持ったのは、当時の文芸評論家が新聞、雑誌で小遣い稼ぎに手掛けていた文芸時評の場であった。

当時の文芸時評家は、自分が信ずる文学の理念を持っていた。その理念に適合した作家の作品のみを取り上げ、推奨したのである。

それに対して、今の文芸時評家は、書き手におもねて全方位の作品評を書いているだけである。同人雑誌主宰者の顔色を窺いつつ、たいしたことない作品にお世辞評を書いている体たらくである。

そのような目線では、新人を拾えるわけがないし、作家たちも文芸時評家を信用するわけがない。

だから、何時の間にか出版社の編集者は、新人発掘には文芸時評家に期待せず、自分でさがす努力をするようになったのだ、とも言える。

一方、同人雑誌の集団は、商業文芸誌が同人雑誌の作家を無視するのなら、自分たちで新しい純文学作家集団のジャーナリズムを形成して、純文学の牙城を守ろう、とする動きが活発になって来た。

営利目的の商業出版社の雑誌が、純文学を拒否して掲載しない方針なら、自分たちの発表の場を、全国規模で作ろうというものである。

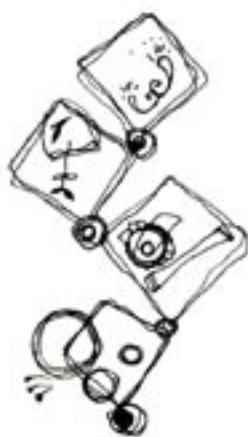
しかし、この場では、作家は、原稿料を自前で負担しなくてはならないから、今までの同人雑誌に所属しているのと同じである。読者層が若干広くなるだけのことである。自分の所属する同人雑誌に義理を欠いてまで、少しばかり規模が大きいだけで、自己負担してまで作品を書こうとする者は限られる。このように、「全国規模」も、その行く末には限界があるだろう。

かつて、東大、早稲田、慶応系列の同人雑誌などは、全国規模で成り立った時代があった。それは、共通した文学理念の旗の下に結集したものであったから、支持されたのである。

単なる同人雑誌の作家の烏合の衆では、先行きは厳しいと言わねばならないだろう。

そうした歴史的経緯から、新しい時代の同人雑誌の未来の展望を学習する事が出来るだろう。

(根保孝栄)



銀華文学賞 スポンサー募集

銀華文学賞を支援して下さるスポンサーを募集しています。賞金・記念品などご提供していただける方がいらっしゃいましたら、ご連絡下さい。1口1万円で御支援いただけましたら幸いです。

アジア文化社五十嵐勉までご連絡下さい。

TEL&FAX03-5706-7848

郵便振替 00140-9-770331

名義アジア文化社

文芸思潮バックナンバー

第15号 2007.1 ¥1155

第3回銀華文学賞発表

座談会「暴力的な現在」井口時男・山崎行太郎・小林広一・河林満・司会=五十嵐勉

小説=「峠」五月薫、「雪女郎」原石寛、「内蒙古の二等兵」小澤恭、「餌食」中野睦夫

第16号 WAVE 2007.3 ¥840

小説=「果皮の表面」室町真、「忍び駒」七浦とし子、「マルクスは古い師」平塚壮吉、「漂流少女」

山口碧、「この戸の向こう側」木村令胡

第17号 2007.5 ¥1155

作家座談会「純文学とエンターテインメントの間」勝目梓・高橋三千綱・飯田章

小説=「聖丘寺院（ワット・プノム）へ」五十嵐勉、「消えない音」相川柊子、「黒馬」吉阪市郎、

「針金」内山良久

第18号 WAVE 2007.7 ¥840

小説=名村和実「ばら屋敷」、湊正和「幻の女」、張明彦「時の幽谷に埋もれし」、杉本利男「牛と団扇」

第19号 2007.9 ¥1155

文芸評論家対談「『私』という思考」秋山駿・井口時男

第3回文芸思潮エッセイ賞発表

座談会「世界から見た日本文学」リース・モートン+ジェームズ・レイサイド+五十嵐勉

第20号 WAVE 2007.11 ¥945

第三回現代詩賞発表

尾関忠雄 詩「満月の下の詩人祭」・小説「個人の化石」

張明彦「『たけくらべ』と『紅樓夢』の描写技法の類似」

第21号 2008.1 ¥1155

第4回銀華文学賞発表

座談会「政治と文学」井口時男・山崎行太郎・菊田均・河林満・司会=五十嵐勉

勝又浩「中島敦とはどういう作家か」（講演録）、小沢美智恵「干刈あがた」私論



広告募集

「文芸思潮」掲載の広告を募集します。どうぞご用命下さい。

「文芸思潮」ウェブ1／6広告 4000円から
本号1／4広告 5000円から

ご相談に応じますので、
お気軽にお問い合わせください。

TEL&FAX03-5706-7848

文芸思潮 アジア文化社